

ポスターB-6

ポスター発表(研究)

「移動する子ども」の移動と意識の変容プロセス

—少数散在という文脈にいたユリの事例をもとに—

佐々木ちひろ(名古屋大学大学院生)

研究の目的

本研究の目的は、フィリピン→「移動する子ども」(川上, 2011)がユリ(仮名)だけの学校(孤立環境)→「移動する子ども」が他にも複数いる学校(複数環境)、という移動をしてきたユリの意識の変容プロセスを明らかにすることにより、「移動する子ども」に必要なことばの支援を再考することである。

研究の価値・意義

本研究の意義は次の三点である。(1) 子ども自身のまなざしに着目し、子どもの語りから「移動する子ども」の移動と意識の変容プロセスを明らかにしたこと。(2) 国内の少数散在という文脈にいた「移動する子ども」に言及し、これまで論じられることのなかったそのような子どもの内面について述べたこと。(3) 「移動する子ども」の移動と意識の変容プロセスを他者との関係からとらえたこと。

研究方法

発表者は研究協力者であるユリに小学校で支援を行っていた。本研究で用いるデータは、ユリに孤立環境・複数環境で行った計2回のインタビューの記録と支援実践記録である。そのデータを、次の二つの視点から分析した。(1) 孤立環境でユリは自らや自らのことばに対してどのような意識をもったのか。(2) 複数環境でユリの意識はどのように変容したのか。

結果と考察

分析の結果、次の二点が明らかになった。(1) 孤立環境で自分のルーツを肯定的にまなざせなくなる→複数環境で自分のルーツをまなざすようになる、という自らに対する意識の変容。(2) 孤立環境ではその環境に適応するためのもの→複数環境では意味ある相手と関係を構築するためのもの、という自らのことばに対する意識の変容。この結果から、「移動する子ども」へのことばの支援では、次のことばの力を経験の中で育成する視点が重要であることが示唆された。(1) 移動により環境が変わる中で人間関係を構築するためのことば。(2) 移動により生じるアイデンティティの問題に向き合うためのことば。

【引用文献】

川上郁雄(2011)『「移動する子どもたち」のことばの教育学』くろしお出版